

存在価値と能力価値のバランスに関する現象学的問題

景山洋平（東京大学／日本学術振興会）

はじめに

田島明子氏の原著『日本における作業療法の現代史』は、序論にある通り、我が国の作業療法学で盛んに論じられ、またセラピストの臨床でも一定期間よく語られた「障害受容」への違和感に動機づけられている。その違和感は、第一に、障害受容の語がセラピストによって理論の一貫性を欠いたしかたで都合よく使われるような状況に対するものである。そこから、著者は、障害受容論が語られてきた我が国のリハビリテーション学・作業療法学の言説を系譜的に研究し、諸理論の錯綜を解きほぐして、今日にいたる推移を解明している。また第二に、「障害受容」の語が、リハの対象者に対するある種の抑圧的権力の行使になっている事実も、著者の議論を動機づける。具体的には、従来の障害受容論が、「能力価値」、則ち「できる」ようになる事に価値を見いだす尺度に拘束されており、その結果、対象者の「ある」がままの姿 — 例えば就労希望 — が抑圧されてしまう事態が、著者が取り組む問題状況である。そして、以上の問題意識から、著者は、「存在価値と能力価値の倒置」におちいることなく、対象者の「存在の肯定」を達成できる作業療法学の可能性を構想するのである。

存在価値を基盤とする著者の立場を全面的に受け容れた上で、以下では、存在価値と能力価値のバランスについて検討する際の現象学的問題をいくつか提起したい。たしかに著者の趣旨は両者が「倒置」された状況に対して、抑圧された存在価値の復権を試みるものである。だが、著者は「能力価値は要らない」と主張するのではなく、「存在を肯定する、あるいは否定しない『能力』との付き合い方」(286)を認めている。この点は、存在価値というものを具体的内容を完全に捨象された形式的なものにせず、人間が実際になし得る作業と接続して考える為には、決定的な重要性を持つと思われる。例えば、寝たきり老人のように身体的な能力価値が極限まで縮小した場合でも、その人がただ存在する限りにおいて、社会的な人格としての役割能力（生き続けて世話されることによって、配偶者の心の支えとなれる、など）は残りつづける¹。この能力価値は、他者との関係なしには成り立たないものだが、各人が自らのかけがえのない存在を肯定されたものとして感じるものと不可分に

¹ 私の父方の祖父は、他界する数年前からアルツハイマーを患って寝たきり状態になった。病院の個室で、訪問する家族もほとんど識別できないまま最後の数年をずっと寝て過ごした。意識がはっきりした時に、これ以上延命しないよう父に頼んだこともあるらしい。だが、祖父が生き続けて、祖父の世話をすることは、祖母にとっては心の支えとなっていた。

結び付くはずである。もちろん、身寄りの全くいない寝たきり老人もいるだろうが、そういう人にこそ「生きて、そこに『いて』くれて、ありがとう。」と、その人がただ生きて存在しつづける限りで、他の人びとに対してある役割を果たしていることが伝えられるべきだと思われる。勿論、その老人が《他の人に対して役割を果たすから》その人の存在価値が認められるのではない。だが、その人の存在がそれ自体で肯定される事は、「あなたが生きてここにいてくれる事は、(社会を構成する) 私たちにとって大切な事である。生きていてくれてありがとう。」と、無数の役割のネットワークである社会内の位置がその人に与えられることと切り離せないだろう。また、身体的な能力価値が存在価値と必ずしも排反しない事は、著者が熊谷晋一郎氏の「私の動き」(286)の議論に言及する通りである。

1 「存在」の為の《手段》としての「能力」:《バランス》の取り方の基本

《バランス》の考察上の範例となる臨床経験とその本性に関する主導的な洞察を著者が明快に示しているので、まずそれを確認しよう。

第六章で、著者は、脳出血・髄膜炎の後遺症で身の回りの動作がほぼ全介助の状態となったAさんを担当した経験を記述している。著者によれば、Aさんは《家族の介助負担が軽減するほど》には機能的に回復しなかった。だが、リハの最初と最後で、家族がAさんに対して関わる仕方が変わったという。具体的には、リハの最初では、Aさんの夫は「(Aさんを) 自宅に帰すのは難しいですね」(275)と述べており、家族にとって現在のAさんは発障前の過去のAさんから断絶していたが、その後、ポシェット製作やクッキー作り、音楽会といったリハの過程を経て、最後には、家族にとってAさんは再び家族の一員としての同一性 — しかも未来に向けて共に生きてゆくべき一員としての時間的な同一性 — を取り戻した(283)。

以上の経験の分析から著者は、作業療法における「作業」の意義として、従来の作業療法学における「適応」モデルとは異なる、『作業』のうちに存在が顕在化されることをめぐる個人と他者・環境の循環」(285)を取りだす。私なりに換言すれば、これは、《クライアントが作業を通じて他者や環境と交渉しあい、正にそのことにおいて、自分自身にとっても、また他者・環境にとっても、他でもない本人自身にふさわしい仕方で新しく現れでる》と表現できる事態である。そして、その際の著者の力点は、クライアントのこうしたかけがえのない「存在」が、他者(他物)との応答関係にさらされる偶有性において初めて、真にありありとした仕方で立ち現れるということにある(264f.)。無論、この応答関係を惹起するものこそ「作業」に他ならない(285)。

しかるに、私が注目したいのは、作業を通じてクライアントの存在が立ち現れるこのダイナミックな過程の内に、再び「能力」の介在が許容されていることである。Aさんの場

合、上述のとおり、家族の介助負担を減じるほどの「能力」の回復は認められなかった。だが、著者によれば、ポシエット製作や音楽発表会などでAさんが自分の仕方で「能力」をあらわした事は「家族の記憶にAさん『らしさ』を蘇らせていた」(286)のである。つまり、この場合、「能力」は、クライアントが他でもない本人自身にふさわしい仕方で新しく現れでるプロセスにおいて、言わば媒体の役割を果たしている。この事は本質的に重要な意味を持つと思われる。というのも、クライアントの「存在」が立ち現れる過程が《他者や環境との循環／呼びかけ＝応答》のダイナミズムである場合、そのような循環や呼応関係を持続させる媒体として、他者や他者たちが作り上げた環境に事実として存在する尺度＝能力価値がなにがしか役割を果たさねばならないはずだからである。これが全く欠けていれば、クライアントの応答が相手に理解されないので、著者が「作業」に託する呼応のダイナミズムもなかなか持続しないのでないだろうか²。この点は、クライアントが家族や地域などのさまざま他者と生きていく事情を考えれば、実際上も高い重要性をもつはずである。

これは、著者が「作業をめぐる存在／能力論」(287)として既に示した問題領域である。そこで、私がすぐ上で述べた《媒体》という表現を敷衍すれば、作業をめぐる存在と能力の関係の一面を次のように定式化できないか。つまり、《個人と他者・環境の循環関係・応答を通じて、作業は人びと（特に個人）の存在を現れさせる。その際、各人がそれぞれ発現する能力（できる）は、循環関係の持続を支える《応答相手の自印》になる》、と。能力がこうした《手段》の役割を果たせるのは、「何かができる」ことは誰にとってもやはり自己実現の重要な形態である以上 — この点で従来の「適応」モデルの人間観の正しい部分を汲むべきだと考える — 、他者にとっても、他者に見られる事を自覚する「私」自身にとっても分かりやすいからである。

2 存在価値と能力価値のバランスに対する現象学の関わり方

こうして、対象者の存在を現れさせる「作業」に《手段としての能力》を組み込むことで存在価値と能力価値のバランスを取る場合、ここで問題となる事柄に対して現象学が関わる仕方には大別して二種類ある。

第一は、リハに関わるクライアント本人、家族など親密圏の人間、セラピストなど広い意味での現場の当事者が、自分自身で現象学を行い、《能力を媒体＝手段としてクライエン

² もちろん、「障害者は健常者の尺度に合わせろ」などと言いたいわけではない。応答関係において一番重要なことは、相手のことが分からなくとも、自らの存在を現す努力のなかにいる相手へと耳を傾けることである。ここで問題となるのは、存在がそこで顕在化される応答関係をスムーズにする媒体として、能力＝「できる」を位置づけ直すことである。

トの存在が現れで、とはどういうことか(what it is like?)》を自分自身の経験に則して記述するものである。元来の現象学とは、フッサールやハイデガーの著作に書いてある固定化された学説ではなく、《先入観を解体しながら、各人の視点に立って物事を見る営み》なのだから、これが何より優先されるべきである。その好例として、上記で田島氏の臨床経験の記述を挙げたのだ。この場面では、私のような大学の現象学者はボキャブラリーを提案する以外の役割を持つまい。

だが第二に、リハの現場(=現象)に触れていない大学の現象学者でも関われる課題として、基本的な概念の分節化を通じて、《存在価値と能力価値のバランス》という事象の輪郭に外側から接近する可能性はあるだろう。事実、《各人の「私」の存在の現れ》や《各自の存在の抑圧・忘却》といった事態は、実存思想的な色彩をもつ現象学 — ハイデガー、メルロ＝ポンティ、サルトル、レヴィナス、後期フッサール etc. — によって大いに主題化された事象である。彼らの分析は、時に健常者の視点に拘束される事もあるが、基本的には障害者・健常者を問わない普遍的な仕方、かけがえのない各自の存在(自己)のあり方を明らかにしようとした。無論、この極めて一般性の高い知見をそのまま多様な臨床経験に適用するなど論外である。だが、《存在価値と能力価値のバランス》という主題において幾つか一般性の高い大きな問題圏が分化することも事実なので、これに取り組む為のツールとして現象学の理論的遺産を利用することは有意義だと思われる。以下の私の問題提起もこうした態度から為される。

3 存在価値と能力価値のバランスを巡る問題圏と現象学の関わり

対象者の存在を現れさせる「作業」に《手段としての能力》を組み込んで存在価値と能力価値のバランスを取るとする場合、その事態を概念として明確化する為に重要なことは、バランスが取れていない状態(例えば、両価値の「倒置」など)との区別を検討することである。そして、その為には、第一に、区別を成り立たせる両状態の具体的特徴を積極的に検討する課題と、第二に、両状態の区別をそもそも可能とするような原初的でミニマムな条件を取り出す課題が求められる。以下、順に検討する。

(a) 両状態の具体的特徴：《自己解釈の檻》⇔《自己を開く技法》

まず、著者の見事な定式を繰り返すと、存在の肯定にとって一番大切な事は「『作業』のうち存在が顕在化されることをめぐる個人と他者・環境の循環」(285)である。《手段としての能力》は、あくまでこの循環の一部としてこれに仕えるべきものである。Aさんにとってポシエット製作や音楽演奏がそうであったように。換言すると、能力の介在において存在が肯定される為には、《手段としての能力》は、それを媒体としてクライエントが他者や環境との応答関係に開かれる限りで、存在価値とのバランスを達成するのである。そこ

で、このことを形式的に裏返せば、存在価値と能力価値のバランスが崩れた状態も規定できる。すなわち、それは、能力価値の介在によってクライアントと他者・環境（一定の意味ではクライアント自身の身体も）との応答関係が遮断・忘却される状態である。

後者のバランスが崩れた状態から考えよう。これは、直接には、著者が「存在価値と能力価値の倒置」と名付けた事態である。そして、著者は、これを従来の障害受容言説や我が国の介護法制の検討を通じて、具体的にその現れを明らかにした。これに対し、この場面で現象学が提起する論点は、そのような遮断状態が各人にとってもつ一般的意味である。則ち、「『できる』ことの価値観が各人の環境や他者との応答関係を遮断し、併せて、各人自身の存在をも抑圧してしまう」という状態が、各人自身によってどのように生き抜かれているか、が問題となる。

しかるに、管見では、こうした遮断状態が成立する為の条件は、能力価値による各人の自己解釈がいわば物象化・自己目的化することである。換言すれば、それは、能力の発現を誰かと具体的に共有したり、環境を操作してうまく行ったりした場合の充実感を飛び越えて、抽象化された「できる」事それ自体が当人の価値の自己解釈を構成してしまうことである。簡単な例で言えば、この場合、「走って体を動かすことで充実感をえる」でも「誰かと走るのが楽しくて充実感をえる」でもなく、「他の人よりも速く走れるので充実感をえる」のような《他人との成果の比較》に能力価値の焦点は移ってしまう。こうなると、自分が能力をあらわす中で他者や環境と交わす具体的な応答関係はどうでもよくなってしまい、そうして、実際の作業から切り離されても語れるような「私はあいつよりも凄いんだ」という抽象的な能力価値が成立する。正確な問題関心は異なるが、具体的な他者・環境との応答関係から切り離されて、抽象的な自己解釈・世界解釈へと転落する機制を、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』のフッサールは「理念の衣」による「生活世界(Lebenswelt)」の忘却として、『存在と時間』のハイデガーは《他でもない「私」自身の選択として他者・環境に関わらず、漠然とみんなに共有されるだけの規範に流される「世人(das Man)」》として分析している。

これは、自らの能力についての解釈によって、(他者・環境と呼応する)存在と元来は結び付いた能力を抽象化してしまう、言わば《自己解釈の檻》と呼ぶべき事態である。そして、事実問題として、人類は、古代から現代に至るまで多かれ少なかれこの抽象的な能力価値を抱いてそれに則した生活習慣を形成してきたし、この習慣に対応した生活環境を形作ってきたように思われる。そのような社会で生まれ育てば、「できない」事によって存在が否定されるかのように感じてしまう事は当然である。それ故、存在価値と能力価値の倒置に対峙するとは、根本的には、障害者もセラピストも健常者もみな根深く巻き込まれているこのような伝承された生き方の歴史的蓄積 — ハイデガーはこれを「被解意性

(Ausgelegtheit)」と呼ぶ ― を注意深く浮き彫りにし、それを変えてゆく努力をするしかないだろう。その際、著者が実践した《作業療法の現代史》という系譜学的方法は非常に有益なものとなる筈であり、ハイデガーも自らの文脈で「現象学的破壊(phänomenologische Destruktion)」という歴史研究を行い、正にその事によりハイデガー本人が置かれている現代の状況の秩序を浮き彫りにしようとする。

それでは反対に、存在価値と能力価値のバランスがとれた状態はどうか。繰り返す通り、それは、手段としての能力を媒体としてクライアントが他者や環境との応答関係に開かれるあり方となる。これが具体的にどのような状態かは、前節で述べた通り、リハの現場の人間それぞれが語るべき事柄である。だが、バランスなき状態との対比から、バランスある状態において能力（演奏できる・料理できる etc.）が果たすべき役割を、もう少し具体化して表現できるだろう。それは、他者・環境との呼応関係によって個人のかげがえのない存在が新しく立ち現れるという、著者が指摘するように根本的には偶発的な事態(265)をいわば「準備」するものである。偶発的な事態、それも、受傷した苦しみがあるきっかけや作業の営みのなかである程度折り合いが付けられるものとなって自分自身の存在を受け容れていることにふと気づいた、という偶発的な事態を、能動的に計画して実現することなど恐らく不可能である（それ故、「障害受容」という語はやはり暴力的である）。だが、そのような事態が起こり得るように、身の回りの世界の触発に自分を開く技法はありえる筈であり、それは、作業という定義上ある能力を発現する行動によって、自ら自身を世界に対して示すこととなる筈である。則ち、この場合、能力は《自己を開く技法》である。私の解釈では、後期ハイデガーが積極的な意味で「テクネー」や「ポイエーシス」という語を用いる時、このような偶発的な事態に身を開くことで自らの真の存在を受容する技法を問題化している。

(b) 両状態の区別を可能とする原初的条件：無力さの苦しみに寄り添うこと

最後に、バランスのある状態とない状態をそもそも区別できるための原初のないし構成的な条件に言及して、議論を終えたい。それは、事故や病気で能力が急に失われたり、老化や疾患によって能力がどんなに頑張ってもだんだんと衰えていく、という能力の消失＝「できない」状態を、たとえ極限的な無力であっても、やはり肯定することである。この点で私は結局著者の洞察に帰っているだろう。この根本洞察は、バランスの有無の区別が成り立つために論理的前提となる。なぜかというと、「できなくてもよい」という最終的な許容の支えがないかぎり、「できる」、つまり能力の自己目的化を否定する根拠がないからである。それゆえ、存在価値と能力価値のバランスは、最終的には、能力が消失してゆく無力感に苦しむ人びとの隣にあって、「あなたが生きてそこにいてくれるだけでありがたい。ありがとう。」と静かに寄り添う人のつながりに支えられている、と言えるように思われる。

多くのセラピストが経験的に実感しているだろうこのもっともプリミティブな事情を、現象学や哲学の言葉で表現する意味があるのか分からないが、後期ハイデガーは根源的な無力さにおける存在の受容を「従容たる落ち着き(Gelassenheit)」や「感謝(Dank)」と呼ぶ。だが、それよりも、同様の哲学的問題を日本語の文脈で考察した西田幾多郎の次の和歌の方が、まったくの無力さへと解体された人間の根底の存在を確認して、それを受け止めることで得られるなによりも強靱な落ち着きをよく表現しているように思われる。1923年、当時既に次女と五女を病で失い、まもなく他界する妻も脳出血で病臥していた西田は、このように歌っている。

わか心深き底ありよろこびも憂の波もとどかじと思ふ

(了)